



Title	事象キャンセルについて：日本語とカンボジア語の 対照研究
Author(s)	ソック, ソワンロッター
Citation	日本語・日本文化研究. 2023, 33, p. 129-142
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95380
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

事象キャンセルについて ー日本語とカンボジア語の対照研究ー

ソック ソワンロッター

1. はじめに

後半の文が前半の文が含意する結果をキャンセルすることは事象キャンセル (event cancellation) と呼ばれている。

- (1) *お湯を沸かしたけど、沸かなかった。 (池上 1981)

(1)は、前半で「沸かす」がその行為の結果として対象が「沸いている」状態を含意するにもかかわらず、後半ではそれが否定されているため、当該の事象キャンセル構文は不自然になるとされる。

しかし、これに対応するカンボジア語では、前半部分が表す意味と後半部分が表す意味が矛盾しているとは感じられない。

- (2) knom baan dam tuuk. haəj pontae tuuk mun baan puh
私 過去 沸かす 水 完了 しかし 水 否定 過去 沸く
「私は水を沸かしたが、水は沸かなかった。」

本研究では、日本語とカンボジア語の事象キャンセル構文の成否を中心に考察することによって、動詞の振る舞いに関する両言語の異同を明らかにしたい。

2. 先行研究

カンボジア語の事象キャンセル構文を分析した先行研究は管見のかぎり存在しない。そのため、本章では、日本語の事象キャンセル構文等に関する先行研究を概観し、事象キャンセル構文の特徴を考察するための基盤とする。

池上 (1981) は、日本語では目的語の有無や種類によって事象キャンセルの容認度が左右されると指摘している。

- (3) a. *お湯を沸かしたけど、沸かなかった。
b. ?水を湧かしたけど、沸かなかった。
c. 沸かしたけど、沸かなかった。

宮島 (1985) は、様々な事象キャンセル構文を日本語母語話者に示し、その回答からそれぞれの構文の自然さを測っている。そして、自然さが強ければ、動詞の結果性が弱くなることを指摘し、動詞ごとの結果性の強弱の度合いを以下のように提示した。左側にあるほうが、動詞の結果性がより強い。つまり、事象キャンセルの不自然さが高まる。

- (4) 動詞の結果性の強さ：
ころす>おとす>こわす>のむ>ぬく>ぬる>あける>わかす>ひろげる>のぼる
>ほる>いれる>うごかす>よわめる>もやす>かわかす>ひやす

影山 (1996) では、日本語でも動詞を複合動詞にすると、事象キャンセルができなくなる

と指摘している。

- (5) a. *そのドアは、蹴り開けたけれど開かなかった。
b. *お父さんは、揺り起こしても起きなかった。

山川(2004)によれば、日本語では事象キャンセルが成り立つ場合でも、結果の達成が含意されているという。そのような場合、矛盾が生じない理由は、結果状態に段階性があり、かつ、それが文脈に依存する *nontrivial standard* を有し、達成された結果状態が曖昧となる現象(結果状態部分の抽象化)が起こるからだと論じている。

- (6) a. 肌を焼いたけど焼けなかった。
b. *干物を焼いたけど焼けなかった。(山川 2004)

<焼けた状態>は段階性を有するが、a.が *nontrivial standard* を持つのに対し、b.は文脈とは関わらず *trivial standard* を持つ。それゆえ、同じような事象キャンセル構文でも、a は自然で、b は不自然となる。

崔(2011)は、日本語では目的語が指示詞や特定の数量詞を伴い、特定名詞句となった場合、事象キャンセルが容認されにくいと主張した。

- (7) a. 皿を乾かしたけど、乾かなかった。
b. {??その皿/*すべての皿}を乾かしたけど、乾かなかった。
(8) a. ?水を沸かしたけど、沸かなかった。
b. *100ccの水を沸かしたけど、沸かなかった。

阿久澤(2013)は、事象キャンセルの可否には変化の自律性と漸進性に関わると主張している。

- (9) 燃やしたけど、燃えなかった。
(10) a. *本を詰めたけれど、本は詰まらなかった。
b. *木を植えたけれど、木は植わらなかった。
c. *ピカソの絵を掛けたけれど、絵は掛からなかった。 阿久澤(2013)

「燃えた」という結果状態は、動作主の動作がなくても起こり得る現象である、つまり、自律性がある。一方、「木が植わった」という結果状態においては、「木」が自分でそれを引き起こす性質を持っておらず、誰かの動作がなければ、「木が植わる」は起こらない、つまり、自律性がない。両者の違いから、変化の自律性があれば、事象キャンセルが容認できると阿久澤(2013)は述べている。

また、変化の漸進性があるというのは、変化結果まで時間がかかる、もしくは時間の幅が認められるということである。

- (11) 子供が大きな模造紙を切ったが、手が疲れてしまい最後まで切れなかった。
(12) ?太郎がその害虫を殺したが、完全に死ななかった。

(11)は、動作主が「切る」動作をしたが、紙が最後まで切れるまで時間がかかる、達成できなかったと解釈できる。つまり、漸進性があると、事象キャンセル構文が許容されるのである。一方、(12)では「死ぬ」が漸進性を持たないので、事象キャンセルが不可能となると

というのが阿久澤（2013）の主張である。

2.1. 先行研究のまとめ

前節で概観した先行研究において、日本語の事象キャンセル構文の適否・自然さに関わる要因として指摘や提案がなされているものをまとめると以下ようになる。

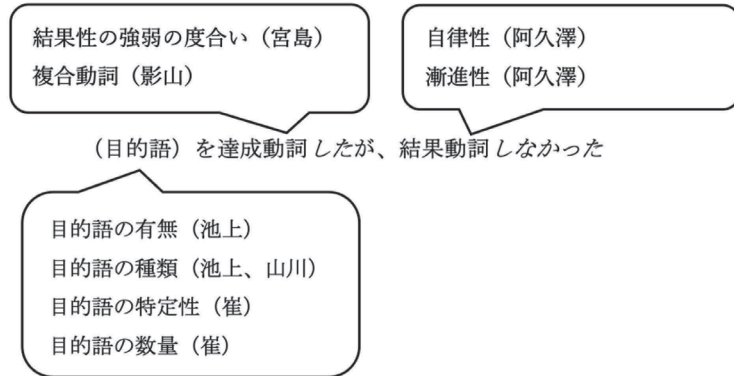


図1 先行研究での日本語事象キャンセルの適否に関わる要因

日本語の事象キャンセル構文が自然に言えるかどうかには、上でまとめたような様々な要因が先行研究で提案されている。しかし、これらの要因すべてがカンボジア語の事象キャンセル構文にとって無関係かどうかは現時点で明らかではない。

3. カンボジア語の事象キャンセル構文

本章では、日本語の事象キャンセル構文に関する先行研究における提案やそこで挙げられた例文を利用しながら、カンボジア語の事象キャンセル構文について考察していく。

まずはカンボジア語の例文を理解する際の助けとするために、カンボジア語の言語的特徴について説明しておきたい。

3.1. カンボジア語について

カンボジア語は類型論的には孤立語に分類され、SVO 語順をとる言語である。動詞の活用、名詞の曲用、テンス、アスペクトなどの機能を示す形態論上の標識をもたない。ペン（2008）は、カンボジア語は動詞を活用させず、時間を表す[msəl meɲ]「昨日」、[yòp meɲ]「昨夜」、[thəi nih]「今日」、[sʔaek]「明日」などで、時制を区別すると述べている。

- (13) ʔaatec mun kɔm (baan) təw siəmriəp
先週 私 （過去）行く 場所名
「私は先週シェムリアップに行った。」

(13)の[baan]は、必須ではない。[ʔaatec mun]「先週」が過去の時間を表し、[baan]がなくても、カンボジア語の文として自然な過去の出来事を表す文である。ペン（2008）によると、[baan]という過去を表す語や[haəj]という完了を表す語もあえて言わなくても自然な場合が

ある。

またカンボジア語には「動詞連続」という構造があり、一つの文中に複数の動詞句が接続詞を介さず連続する。動詞をV、名詞をNで表す。

$$V_1 (N_1) V_2 (N_2) V_3 (N_3) \dots$$

N_1 は V_1 の目的語にも、 V_2 の主語にもなる。同時に両方になることもある。 N_1 が目的語なのか、主語なのかは文脈で判断する。以下はカンボジア語の動詞連続の例である。

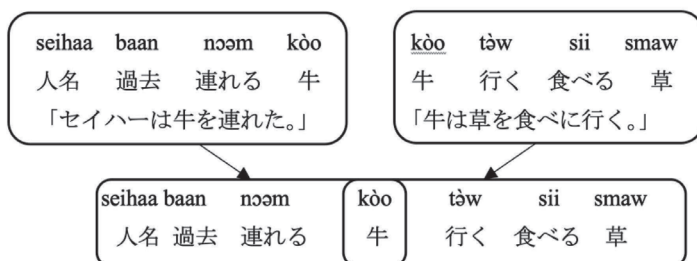
(14) seihaa baan nɔəm kòo tàw sii smaw

人名 過去 連れる 牛 行く 食べる 草

名詞 動詞₁ 名詞 動詞₂ 動詞₃ 名詞

「セイハーは牛が草を食べるように連れて行った。」

「セイハーは牛が草を食べるように連れて行った」は「セイハーは牛を連れた」と「牛は草を食べに行く」のように分けられる。名詞「牛」が表れるのは一つだけだが、動詞「連れる」の目的語であると同時に、動詞「食べる」「行く」の主語の役割も持つ。



「セイハーは牛が草を食べるように連れて行った。」

図2 カンボジア語の動詞連続文の構造

3.2. カンボジア語の事象キャンセル構文で扱う動詞の分類

カンボジア語の「達成動詞」は、語彙的か統語的かで2つに区別される。両者の相違は、語幹ⁱⁱに派生接辞（接頭辞、接中辞）を追加するか、それとも、句を追加するかである。

統語的な達成動詞は[tvəə ʔaɔj]という使役の表現を結果動詞の前に付加する。一方、語彙的な達成動詞は、形態的な観点から2つのパターンに分けられる。

一つ目は派生関係が形態動詞ペアである。これらの動詞ペアは何らかの共通する語幹を持っている。例えば、[səmɲuot]（乾かす）と[sɲuot]（乾く）は、前者にある[ɔm]という接中辞を取り除けば、後者の[sɲuot]（乾く）が見られる。

二つ目は、共通の語幹を持たない異形の動詞ペアである。すなわち、達成動詞と結果動詞は補充形(suppletive)の関係にある。[kap]（切る）と[dac]（切れる）、[dot]（燃やす）と[cheh]（燃える）などの動詞ペアでは、意味的に対応しているが、形態的には無関係である。

	パターン	例
語彙的な動詞ペア	共通の語幹を持つ形態的な動詞ペア	səmŋuot-squot səmlap-slap
	共通の語幹を持たない形態的な動詞ペア	kap-dac dot-cheh
統語的な動詞ペア	語彙的な動詞ペアがなく、tvəəʔaoj の付加によるもの	tvəəʔaoj kooc-kooc tvəəʔaoj prɔ'laʔ-prɔ'laʔ

表 1：カンボジア語の意味的な動詞ペア

3.3. カンボジア語における事象キャンセル構文の振る舞い

本節では、日本語の事象キャンセル構文をカンボジア語で表現した場合に容認されるかどうかを確認することを通じて、これまで提案された事象キャンセル構文の適否に関わる特徴がカンボジア語にも当てはまるのかについて検討する。

以下、目的語に関わる要因、達成動詞に関わる要因、結果動詞に関わる要因の3つの観点に分けて考察を進めていきたい。

3.3.1. 目的語に関わる要因

池上 (1981) は、目的語を持たない場合は自然な事象キャンセル構文に目的語が加わると不自然になることがあると述べている。しかし、カンボジア語では、目的語の有無に関係なく、事象キャンセル構文は自然に使える。

- (15) a. dot slək chəə haəj pontae vi'ə mun cheh
燃やす 葉 木 完了 しかし あれ 否定 燃える
- b. dot haəj pontae vi'ə mun cheh
燃やす 完了 しかし あれ 否定 燃える

山川 (2004) では、「肌を焼いたけど、焼けなかった」が容認されるのに対して、「干物を焼いたけど、焼けなかった」は容認できないと指摘した。しかし、対応するカンボジア語の文では、自然となる。

- (16) knom baan ʔaŋ trəi ŋiət haəj pontae vi'ə mun mchʔən
私 過去 焼く 干物 完了 しかし あれ 否定 焼ける

以上のカンボジア語の例を見る限りでは、動詞の目的語の有無は事象キャンセル構文の適否に関わっていないと考えられる。

崔 (2011) は、日本語では目的語が特定名詞句となった場合、事象キャンセルが容認されにくいと指摘した。カンボジア語では次に示すように、そのような影響は見られず、適格文となる。

- (17) knom baan kap sac mən muoj neh haəj pontae vi'ə mun dac
私 過去 切る 肉 鶏 1 これ 完了 しかし あれ 否定 切れる

「私はこの鶏肉を切ったが、切れなかった」

同じく、目的語が数量詞を伴った場合も特定名詞句になると崔(2011)は指摘している。カンボジア語では次に示すように、このような数量詞付加による影響は見られず、適格文となる。

- (18) kpom baan səmlap klaa 5kbaal haəj pontae vi'ə mun slap
私 過去 殺す 虎 五頭 完了 しかし 虎 否定 死ぬ
「私が虎を五頭殺したが、死なかった。」

- (19) kpom baan dam tuuk llit haəj pontae tuuk mun puh
私 過去 沸かす 水ーリットル完了 しかし 水 否定 沸く
「お湯を1リットル沸かしたけど、沸かなかった。」

3.3.2. 達成動詞に関わる要因

影山(1996)は、日本語では動作を表す「蹴る」や「揺る」などを達成動詞に前置して複合動詞にすると、事象キャンセル構文が不自然になると述べている。しかし、カンボジア語では、複合動詞にしても、事象キャンセル構文が自然に使えることに変わりはない

- (20) təat baək tvəa pontae vi'ə mun baək
蹴る 開ける ドア しかし あれ 否定 開く
「ドアを蹴り開けたが、開かなかった」

- (21) kpom rup dah pa kpom haəj pontae kəət mun kraob
私 押す 起こす 父 完了 しかし 彼 否定 起きる
「父を押し起こしたが、彼は起きなかった」

宮島(1985)は、動詞の結果性が強いほど、事象キャンセルが不自然になると述べている。結果性がもっとも強い動詞として、宮島(1985)が挙げているのは「殺す」と「落とす」である。カンボジア語の「殺す」を用いた例は3.3.1で挙げたように自然な文である。「落とす」を使用したカンボジア語の例は(22)のようになるが、これも容認される文である。

- (22) kəət baan tumleak svaai haəj pontae svaai mun tleak
彼女 過去 落とす マンゴー 完了 しかし マンゴー 否定 落ちる
「彼女は(マンゴーの木から)マンゴーを落としたが、マンゴーは落ちなかった。」

つまり、結果性の強弱の度合いは、カンボジア語の事象キャンセル構文の適否には影響しないと考えられる。

3.3.3. 結果動詞に関わる要因

変化の自律性があれば、事象キャンセルが容認できるが、自律性がなければ、容認されにくいと阿久澤(2013)は述べている。例えば、「絵がかかる」は「絵」自らが「壁にかかる」という変化結果を引き起こさない。つまり、自律性がなく、「かける」動作が必須である。したがって、日本語であれば、(23)のように結果動詞に自律性がない場合は容認できないは

ずであるが、カンボジア語では、自然な文である。

- (23) pjuo ruub kumnnoo pikaso haəj pontae vi'ə cab
 かける 絵 人名 完了 しかし それ かかる
 「ピカソの絵を掛けたが、掛からなかった」

阿久澤（2013）は、結果が段階的に変化しするものではない場合、つまり、漸進性がない場合、事象キャンセルができないと述べている。「死ぬ」や「割れる」などは漸進性がない動詞である。したがって、これが事象キャンセル構文における結果動詞となっている場合、日本語では不自然になるが、カンボジア語では、(24)のように後件文の動詞が「死ぬ」の場合も矛盾が生じず、自然な文である。

- (24) səmlap sat cəŋrai nòh haəj pontae vi'ə mun slap tɔəm sroŋ
 殺す 害虫 それ 完了 しかし あれ 否定 死ぬ 完全

以上の考察から、日本語で事象キャンセル構文が容認されない場合でも、カンボジア語では、まったく矛盾なく事象キャンセル構文が容認されることが明らかとなった。

しかし、カンボジア語では、必ず事象キャンセル構文が容認されるかということ、実はそうではない。次節では、カンボジア語で当該構文が容認されない場合を考察する。

3.4. カンボジア語で事象キャンセル構文が容認できない場合

本節では、事象キャンセルが不自然になる二つの場合を観察する。

3.4.1. 統語的な動詞ペア [tvəə ʔaoj] による派生

カンボジア語の達成動詞では、統語的な達成動詞と語彙的な達成動詞に分けられる。統語的な達成動詞は結果動詞に [tvəə ʔaoj] という使役的表現を加えて形成する。以下のカンボジア語の例が示すように、統語的な動詞ペアでは事象キャンセル構文が不自然だと判断される。

- (25) *kɲom baan tvəə ʔaoj ʔaaw prɔ'laʔ haəj pontae vi'ə mun prɔ'laʔ
 私 過去 使役 服 汚れる 完了 しかし あれ 否定 汚れる
 「私はシャツを汚したが、汚れなかった。」

(25)において、「汚す」は、[tvəə ʔaoj]と結果動詞[prɔ'laʔ]「汚れる」を用いて表現されている。つまり、当該の例における「達成動詞」は、「(服を) 汚れさせる」という表現方法によって造られている。

(25)のような[tvəə ʔaoj]を用いた「達成動詞」は語彙的な達成動詞と異なり、目的語の変化結果を含意する。つまり、カンボジア語で「服を汚す」という表現は「服が汚れる」ことを含意する。そのため「服が汚れなかった」という意味の文と共起できない。

なお、統語的な「達成動詞」の場合に目的語の変化結果が含意される理由は、使役の意味を含むからではない。なぜなら、通常の[ʔaoj]のみによる使役は、必ずしも結果を含意せず、事象キャンセル構文が可能だからである。

- (26) kɲom ʔaoj vanda ʔɲkuj haəj pontae kəət mun ʔɲkuj
私 使役 人名 座る 完了 しかし 彼 否定 座る
「私はワンダーを座らせたが、彼は座らなかった。」

上の (26) は自然なカンボジア語である。つまり、前件文の使役文は「ワンダーが座った」ことを含意していないことを示している。

3.4.2 [baan]と[ʔoh]

カンボジア語では目的語の数量を表す「一頭」や「1 リットル」などのような表現を付加しても、事象キャンセル構文の適否に影響が見られない。しかし、カンボジア語では、このような数量表現の前に、[ʔoh]や[baan]を付けると、容認できない構文に変わる。

- (27) *kɲom baan sɔmlap klaa ʔoh 1kbaal haəj pontae vi'ə mun slap
私 過去 殺す 虎 ʔOH 一頭 完了 しかし 虎 否定 死ぬ
「私が虎を一頭殺したが、死なかった。」

- (28) *kɲom baan dam tuuk baan 1lit haəj pontae tuuk mun puh
私 過去 沸かす 水 BAAN 1L 完了 しかし 水 否定 沸く
「お湯を1 リットル沸かしたけど、沸かなかった。」

(27)と(28)では、事象キャンセルが容認できない。それは前件文において目的語の変化結果が含意されるからである。[ʔoh]や[baan]を付けることで前件文は結果が明確にされ、結果をキャンセルする後半文と共起することができない。

なぜ[tvəə ʔaoj]や[ʔoh]や[baan]が表れると、容認できなくなるのだろうか。これについては、次章で詳しく考察する。

4. カンボジア語の事象キャンセルが不可能な理由

4.1. [tvəə ʔaoj]

カンボジア語における統語的な達成動詞と語彙的な達成動詞の相違は、意志性を示す副詞がつかない場合に、意志的な動作を表すのか、無意志的な動作を表すのかという点にある。以下の例を参照されたい。

《Aさんは、財布が床にあるのを見かけた。AさんがBさんに理由を聞く。》

- (29) 質問: haet ʔavəi baan cəə ka'boop-lɔj tleak ?
理由 何 過去 財布 落ちる
「なぜ財布が落ちている？」

返事: a. kɲom baan tumleak vi'ə
私 過去 落とす あれ

「私がわざと財布を落とした。」

- b. kɲom baan tvəə-ʔaoj tleak ka'boop-lɔj
私 過去 使役 落ちる 財布

「私はうっかり財布を落とした。」

(29a) の「財布を落とす」は意志的に落とすということを伝えている。意志性を持つ副詞が付かなくても、意志性があると解釈される。つまり、[tumlɜəʔ] (落とす) という語彙的な達成動詞は、自分の行為を動作主が意識して行うという意味特徴を持つ。一方、(29b) では、[tvəə-ʔaoj] と [tlɛak] (落ちる) によって「落とす」という出来事を表現している。この場合、主語の「私」には財布を落とす意志がなく、自分のミスで財布が落ちた状況になったと解釈される。

[tvəə ʔaoj] は無意志的であるため、主語は有情物でなく、無情物でもよい。

(30) ruəŋ nəh baan tvəə ʔaoj kɲom jəm

映画 これ 過去 使役 私 泣く

「この映画は私を泣かせた」

(30) のように無情物のような「この映画」でも、主語になることができる。

カンボジア語における事象キャンセル構文の適否は、意志性と関連すると考えられる。

(31) kɲom baan səmŋuot ʔaaw haəj pontae ʔaaw mun baan sɲuot

私 過去 乾かす 服 完了 しかし 服 否定 過去 乾く

「私はシャツを乾かしたが、シャツは乾かなかった。」

(32) *kɲom baan tvəə ʔaoj pyanoo kooc haəj pontae pyanoo mun kooc

私 過去 使役 ピアノ 壊れる 完了 しかし ピアノ 否定 壊れる

「私はピアノを壊したが、ピアノは壊れなかった。」

(31) は、語彙的な動詞ペアが使われており、前件の動詞は意志的であるため、事象キャンセルが可能となる。他方、(32) は、前件の動詞は統語的な [tvəə ʔaoj] 達成動詞が使われており、無意志的であるため、事象キャンセルが不自然になる。

両者の違いは、語彙的か統語的かという、動詞ペアの形成方法が原因ではないことを指摘しておきたい。なぜなら、[tvəə ʔaoj] に意志性を表す表現を付け加えることも可能で、その場合は、前件が意志的な動作を表すことになるので、事象キャンセルが可能となるからである。

(32') kɲom baan miən ce'tanaa tvəə ʔaoj pyanoo kooc haəj pontae pyanoo mun kooc

私 過去 故意に 使役 ピアノ 壊れる 完了 しかし ピアノ 否定 壊れる

「私はピアノをわざと壊したが、ピアノは壊れなかった。」

峰岸 (1986) は、カンボジア語の動詞を「する」動詞と「なる」動詞に分類した。峰岸 (1986) はこれらの動詞を以下のように定義する。

一般にクメール語では、動作主が自らの意志によって行うことのできる(あるいは、行おうとすることのできる)動作と、誰の意図とも無関係に、いわば状況によって成立する事態とを明確に区別して表現する。そこで、前者を「する」動詞、後者を「なる」動詞と呼ぶことにする。(峰岸 1986:3)

坂本 (1988) も、動作主の意志性の有無によってカンボジア語の動詞を分類し、それを随

意動詞と非随意動詞と呼んでいる。このような意志性に基づく動詞分類の提案は、カンボジア語において動詞が意志的であるかどうかを重要であることを示唆している。

4.2. [ʔoh]と[baan]

先述したように、通常は事象キャンセルできる場合でも、[baan]や[ʔoh]が加わると、キャンセルが容認できなくなる。

峰岸(1986)によれば、[baan]は無意志動詞の一つだと指摘されている。[baan]は「得る」という意味よりも、「手に入る」のイメージに近いだろう。坂本(2001abc)の『カンボジア語辞典』によると、[ʔoh]は「尽きてなくなる」や「なくなる」という意味を表す。「なくなる」は意志性がないため、無意志動詞である。

3.1. 節ではカンボジア語の動詞連続の特徴について述べたが、[ʔoh]と[baan]が現れる場合も動詞連続として捉えることで、なぜ事象キャンセルができなくなるかが説明できる。

- (33) *kɲom baan sɔmlap klaa ʔoh lkbaal haəj

私 過去 殺す 虎 なくなる 一頭 完了

「私が虎を一頭殺した。」

- (34) *kɲom baan dam tuuk baan 1lit haəj

私 過去 沸かす 水 得る 1L 完了

「お湯を1リットル沸かした。」 $VP_1(=V_1N_1) V_2(N_2) V_1$

(33)において、前件の文は、[sɔmlap klaa] (虎を殺す)を $VP_1(=V_1N_1)$ 、そして、[ʔoh lkbaal] (一頭なくなる)を $VP_2(=V_2N_2)$ として分析すると、当該の動詞連続は、「虎を殺して、一頭なくなった」を表すと解釈できる。(34)において、前件の文は、[dam tuuk] (水を沸かす)は $VP_1(=V_1N_1)$ であり、[baan 1 lit] (1リットルが手に入る)を $VP_2(=V_2N_2)$ として分析すると、当該の動詞連続は「水を沸かして、1リットルが手に入った」と解釈できる。

坂本(1988)は、 V_2 が無意志動詞の場合には結果を表すと述べている。つまり、カンボジア語では、(33)の前件の意味は、「虎を一頭殺し、(その一頭)がなくなった」のではなく、「森林にいる多くの虎を殺し、一頭なくなった」のようになる。(34)の前件も同様で、「1Lのお湯を沸かし、(1Lのお湯)得た」のではなく、「1L以上の水を沸かし、蒸発したりして水の量が減った結果、1Lのお湯を得た」という意味を表す。例えば、1枚の紙を切って2枚にしたときは以下のように表される。

- (35) kat krɔdaah 1 sɔnlən baan 2 sɔnlən

切る 紙 1 枚 得る 2 枚

「紙を一枚切り、二枚手に入った。」

(33)と(34)の前件を動詞連続と捉えることによって、当該の事象キャンセル構文が不自然になる理由を説明することが可能になる。カンボジア語では、意志性の有無と結果性の有無は相関している。意志的であれば、結果に至る解釈は必須ではないが、無意志的であれば、結果に至ることが含意される。 V_2 である[ʔoh]と[baan]は無意志動詞であり、従って、前

件は結果に至ったことを表す。従って、後件でそれをキャンセルすることは矛盾となり、当該の事象キャンセル構文は容認されない。

動詞連続が日本語に見られるようなタイプ、すなわち、複合動詞の場合でも、同じ現象が観察される。日本語の複合動詞「叩き殺す」は、 V_1 は「叩く」であり、 V_2 は「殺す」である。日本語で「殺したが、死ななかった」が不自然であるように、「叩き殺したが、死ななかった」も不自然になる。これは、 V_2 の「殺す」が結果を含意するからである。カンボジア語では、「殺す」の意志性によって表現が二つ分けられる。

(36) piset baan vai chkae slap

人名 過去 叩く 犬 死ぬ

「ピセットは犬を叩き、犬が死んだ。」

(37) pitoo baan vai somlap chkae

人名 過去 叩く 殺す 犬

「ピトウさんは犬を叩き殺した。」

(36)においては「犬が死ぬ」のは「叩く」の動作をした後の結果であって、叩いて死んでしまったという意味を表す。一方、(37)は犬を殺すつもりで「叩く」動作をしたという意味であって、必ずしも「犬が死んだ」結果を含むわけではない。それは[vai somlap] (叩き殺す) という動詞連続 (複合動詞) の V_2 が「殺す」という意志動詞であるために、結果を含意しなくてもかまわないからである。それゆえ、(36) では、「犬が死んだ」という結果を含んでおり、キャンセルできないのに対して、(37) では、それをキャンセルすることができる。

5. 意志性からの観点

本章では、事象キャンセル構文について、意志性を持たない場合と意志性を持つ場合に分けて、改めて考察する。

5.1. 意志性を持たない場合

以下は佐藤 (2005) が調査した例文である。各例文の末尾の数字は、母語話者に対するアンケートによる自然度を示す (100 は最も自然であることを表す)。

(38) a. あの人を殺したけど、死ななかった。〈37.5〉

b. 銃の扱いを誤ってあの人を殺したけど、死ななかった。〈15.9〉

(38a)と(38b)を比べてみると、絶対に自然だと言えるわけではないが、(38a)の方がどちらかといえば自然であると言える。「銃の扱いを誤って」のように動作主の意志が含まれない偶然的な要素が含まれる場合は、結果が実現したと解釈されやすい。つまり、日本語でも、(38b)のように前件が無意志的であれば、結果が強まる、つまり、本論文の提案と合致する。

また、日本語では残念や後悔などの気持ちを込めて表現するときには、「～テシマッタ」を使用する。「～テシマッタ」表現は「無意識」「うっかり」などの表現と一緒によく用いられる。それは、「～テシマッタ」表現が無意志性を表すからである。池上 (1981) で自然だ

と指摘されている(39a)の事象キャンセル構文に「～テシマッタ」を追加すると、不自然になる。ここでも、無意志的であることが結果の含意を引き起こしており、矛盾になる。

(39) a. 花子を起こしたけど、起きなかった。

b. *花子を起こしてしまったけど、起きなかった。

カンボジア語においても、元々矛盾なく使用される事象キャンセル構文に無意志的あることを意味する副詞をつけると、日本語と同様、矛盾が生じ、不自然な文となる。

(40) pək sraa sɾavəŋ thlòoj-dai səmɲuot probun

飲む 酒 酔っ払う うっかり 殺す 妻

「お酒を飲んで酔っ払ってしまった。妻をうっかり間違えて殺した」

(40)では、「妻をうっかり間違えて殺した」という文は、結果を含意する。そのため、もし結果を否定する文が付いたら、不自然な文になる。

佐藤(2005)によれば、達成動詞の意味構造は[AGENT:ACT]と[THEME:ACHIEVEMENT]からなるという。意志性は[AGENT:ACT]に含まれる概念であり、結果性は[THEME:ACHIEVEMENT]に含まれる。無意志的な文では、動作そのものよりも、目的語の変化結果が前面に出ていると言える。語彙概念構造では、[THEME:ACHIEVEMENT]が前景化され、[AGENT:ACT]が背景化される。

図3の実線で囲んであるのが、無意志的な行為において重視される部分である。破線で囲んであるのは二次的なもので背景化した部分である。

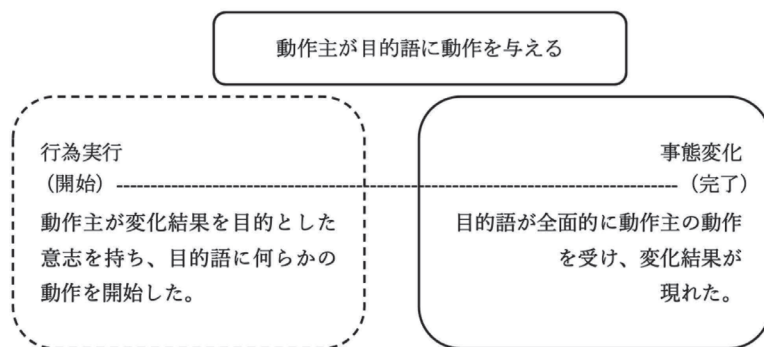


図3：意志性を持たない文の構造

5.2. 意志性を持つ場合

カンボジア語では、前件が意志的であると、後件で対象の結果をキャンセルすることができる。日本語においても、「～（他動詞）しようとしたが、」のように、動作の意志性を明示すると、池上（1981）で不自然だと指摘された(1)の事象キャンセル構文が可能となる。

(41) a. *お湯を沸かしたが、沸かなかった。 (= (1))

b. お湯を沸かそうとしたが、沸かなかった。

カンボジア語においても、事象キャンセルが不可能な[tvəə ʔaoj]構文では、意志性のある副詞をつけることで、自然な文となる。

- (42) kɲom miən ce'tanaa tvəə-ʔaɔj ʔaaw prɔ'la? haəj pontae vi'ə mun prɔ'la?
 私 故意に 使役 服 汚れる 完了 しかし あれ 否定 汚れる
 「私はわざとシャツを汚そうとしたが、汚れなかった。」

能動文である(42)では、動作主の意志性を明示すれば、不自然なカンボジア語の事象キャンセル構文を自然な文に変えることができる。

意志性を明示することで、動作の始まりに焦点が当たり、動作の結果は二次的で重要ではないものとなる。以下の図4の実線で囲んであるのは、前景化される部分である。破線で囲んであるのは二次的なもので背景化した部分である。

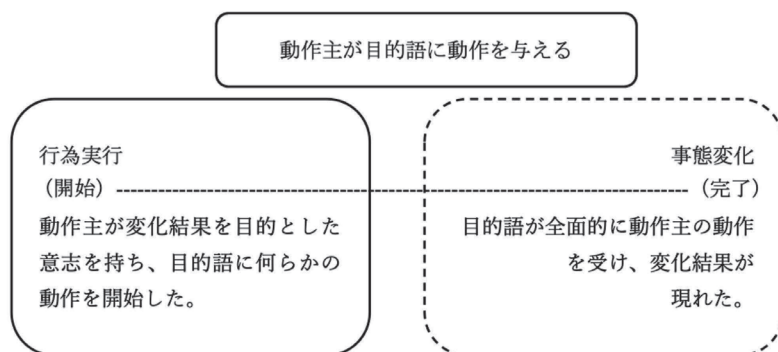


図4：意志性を持つ文の構造

6. まとめと今後の課題

本論文では、事象キャンセル構文を中心に考察し、日本語とカンボジア語とを対照した結果、以下の3点が明らかになった。

1. カンボジア語の動詞にとって、もっとも基本的な意味の特徴は意志性である。意志的な動詞は、動作主の行為の始動に焦点が当てられ、終点の結果性よりも意志性が重要視される。
2. 一方、日本語の他動詞は意志性よりも結果性が重要視されるため、動作の始まりよりも動作の終わりに焦点が当てられる。動作によって目的語に結果がもたらされたことが含意される。
3. 事象キャンセル構文では、前件文で動作主の意志性を強調すれば、結果性が二次的な問題となり、容認できる。逆に、前件文で意志性が弱まると、目的語の変化結果が強調され、結果性が一次的な問題となり、容認されない。

意志性と結果性の現れ方がカンボジア語と日本語とで異なることを理解することは、両言語の外国語教育にとっても重要だと考えられる。

また、本論文では、両言語の動詞における結果を対照し、事象キャンセル構文を中心に考察したが、意志性に関わる使役文、受動文、目的表現などについてはあまり触れなかった。今後の研究課題としては、ブッサバー（1999）のタイ語の対照研究と同様に、使役文、受動文、目的表現における意志性について考察したい。

参考文献

- 阿久澤弘陽 (2013) 「日本語達成動詞の結果性のキャンセル可能性について」『筑波応用言語学研究』20号 pp.30-43
- 池上嘉彦 (1980-1981) 「'Activity'—'Accomplishment'—'Achievement'」—動詞意味構造の類型—」『英語青年』1980.12-1981.3、研究社出版
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』東京：大修館書店
- 池上嘉彦 (1999-2000) 「'Bounded' vs. 'Unbounded' と 'Cross-category Harmony'」『英語青年』1999.4-2000.11 研究社
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版
- 加藤昌彦 (2015) 「ビルマ語の事象キャンセル」『EX ORIENTE Vol.22』大阪大学言語学会
- 坂本恭章 (1988) 『カンボジア語入門』大学書林
- 佐藤琢三 (2005) 「「切っても切れない」とメトニミー」『学習院女子大学紀要』7, pp. 35-46.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- ブッサバー バンチョンマニー (1999) 「動詞の意志性について：タイ語・日本語の対照研究をめざして」『東京外国語大学 博士論文』
- ペン セタリン (2008) 『クメール語入門 (カンボジア語)』連合出版 pp.159-173
- 峰岸真琴 (1986) 「クメール語の動詞連続における/baan/の意義について」『東京大学言語学論集 86』pp.45-57、東京大学文学部言語学研究室
- 宮島達夫 (1985) 「「ドアをあけたが、あかなかった」—動詞の意味における<結果性>—」『計量国語学』14-8、pp.335-353
- 山川太 (2004) 「いわゆる日本語の Event Cancellation について」『日本言語学会 予稿集(128)』pp.227-232
- Haiman, John (2011) *Cambodian: Khmer*, John Benjamins Publishing
- Ieu, Koeus (1995) *Vee:jjakaw: kmae* [Khmer grammar], Institut Bouddhique.

辞典

- 斎藤純男、田口善久、西村義樹 (編) (2015) 『明解言語学辞典』三省堂
- 坂本恭章 (2001abc) 『カンボジア語辞典』東京外国語大学

【注】

ⁱ 括弧は必須的ではない要素を表す。

ⁱⁱ カンボジア語の派生に関しては、Ieu (1995) や Haiman (2011) が詳しいが、派生の方向については、Causative morphemes (結果動詞から達成動詞に派生する) の存在には言及されているが、Anti-causative morphemes (達成動詞から結果動詞に派生する) には言及されていない。つまり、後者のような派生関係にあるペアはないと考えられる。